

議 事 録 (要旨)

配布先	主催 企画課	No.
議事録名 第1回佐久市 CCRC 検討会 作成日 平成27年7月22日		記録者
日 時	平成27年7月21日(火)	開催場所
		議会棟 全員協議会室
		時間
		13:30 ～ 15:50
出席者	委員：雄谷良成、甲斐一郎、小林明、竹尾恵子、辻一郎 オブザーバー：市長 柳田清二、交流推進相談員 山村通夫 事務局：企画部長 矢野光宏、企画課長 佐藤照明、土地調整係長 羽毛田邦治、土地調整係 畠山武尚 地域局長 依田猛、地域整備室長 遠藤修	委員 出5人 欠0人
提出資料	<ul style="list-style-type: none"> ・会議次第 ・資料1 佐久市 CCRC 検討会名簿 ・資料2 検討会概要・設置要領 ・資料3-1 佐久市の概況 ・資料3-2 佐久市の人口の現状分析 ・資料3-3 佐久市の人口推計 ・資料3-4 佐久市の移住情報 ・資料4-1 日本版 CCRC に関する国の資料 ・資料4-2 佐久市の概要（世界最高健康都市関係） ・資料4-3 日本版 CCRC で描く地方創生（雄谷氏提出資料） ・資料4-4 日本版 CCRC の創生に向けて（辻氏提出資料） ・資料5 日本版 CCRC の制度化における基本的な考え方（佐久市 CCRC における方向性） 	
≪ 1 開会 ≫ ≪ 2 委嘱 ≫ ≪ 3 市長あいさつ ≫ ≪ 4 自己紹介 ≫ ≪ 5 座長の選出 ≫ 検討会の概要について事務局より説明 事務局提案により竹尾恵子氏に決定 ≪ 6 会議事項 ≫ (1) 佐久市の概要について 事務局より説明 < 質疑応答 > 委員 ぴんころの里と言われているが、長寿の要因というのは何か。		

矢野企画部長 一つとしては、保健師を中心とした保健活動が活発であったということがある。また、この地域は以前、塩分摂取が多いということがあったが、浅間病院や佐久病院の先生方が積極的に主導し、地域をあげて克服に取り組んできたということもある。

委員 データで見ると長野県は昔から長生きである。佐久市は、長野県の77市町村の中で、女性が一番長生きという調査結果が出た。理由は何かという、なかなか見つからないが、空気がきれい、水がおいしい、それに保健活動などいろいろ考えられるが、これが理由というものはいいだせない。癌が少ないというデータもある。65歳以上の平均余命がかなり長いということが言えるが、死ぬまで元気でいられるか、ピンピンコロリを狙っていくのが次の課題と言えるのではないか。

委員 理由は分からないということだが、空気がきれいで水がおいしい、保健活動も盛んということ、結局そういうことが一番長寿に繋がっているのではないか。それをもっと強く打ち出していくべき佐久市の魅力なのではないか。

委員 当方でも、長野県の長寿の秘訣は何なのかという調査をしたが、理由は分からなかった。塩分摂取量が多かったという話があったが、それで減塩運動を行い、塩分摂取量が低くなったという統計が出ている。また、野菜摂取量が多いという統計も出ている。もう一点は、年を取っても農業など働いているということが良いのではないか。

(2) CCRC を巡る状況等について

●佐久市 CCRC の導入に向けて

市長より説明

- ・佐久市は天災が比較的少なく、直下型地震は起きづらい。
- ・佐久市は観光地が少ないが、暮らす場としては優位性がある。
- ・働く場所の確保というのが重要で、国内回帰する企業に佐久を選んでもらうことも重要である。
- ・医療機関と住民の信頼関係が厚いと考えられる。浅間病院、佐久病院が地域に入っていき命を救ってきたという経過がある。
- ・CCRC で選ばれる街となるには、幸福を感じられるということが重要になる。
- ・佐久市には、生きがいややりがいという面においては、市民活動サポートセンター・給食応援団というシステムがある。
- ・高齢になっても健康や幸福を追求していきたいという方に移住してもらいたい。

●雄谷委員提出資料

雄谷委員より「シェア金沢」等の取り組みについて説明

- ・地元の人がどれだけ主体的に関われるというのが事業を継続するには重要である。
- ・人の暮らしを見せるというのが大事である。
- ・若者から高齢者まで、障がい者が一緒に関わっていくというのが大事である。

- ・施設の計画段階から入居予定者に入ってもらって意見を取り込んで作ってきた。

●辻委員提出資料

辻委員より日本版 CCRC について説明

- ・生きがいを持って生活している人は、生きがいがない人に比べ生存率が高くなるという結果が出た。要介護発生率も低下する。
- ・CCRC という制度をビジネスモデル化するのが重要である。
- ・施設においては、公共空間が重要である。コーディネーターが常駐して居住者を支援するという体制づくりも重要であるが、一番課題になる部分でもある。
- ・佐久市は、既に CCRC があるような地域である。これまでの施策の延長線上に CCRC がある。

<質疑応答>

委員 行政が関わって進めていく事業であるが、一番重要なのは、事業を実施する民間に事業者である。中心になってやってくれる人がいるかどうかということがポイントになってくる。佐久市で実施する場合も、どうやって中心となる人や団体を作っていくのかというのが課題である。

委員 雄谷委員の説明で、地元住民主体で地域づくりを進めるということであったが、移住者というのはどういった位置付けになるのか。また、割合とするどの程度移住者がいるのか。

委員 シェア金沢の場合は、地元住民と移住者の割合は半々である。廃寺を地域コミュニティセンターとした事例では、周辺の地域は全て人口減少している中、当地域は6年間で55世帯が68世帯まで増えている。さまざまな人が集まってのんびり過ごしている空間が非常に癒されるということで、当地域から出ていくという人がなくなった。子供は近くに家を建てて地域に残るが、親子だけではどうしても関係がギクシャクしてしまう。その点、第3者が関わることで、関係性がうまくいき地域から出ていく者がなくなった。また、その方々が自然とコマーシャルとなり、外から人が入ってくるということに繋がっている。無理に「移住してきませんか」という旗を挙げなくても良いのではないかと。場当たりのものはすぐに見抜かれてしまう。移住を検討する人は、地元の人がどのような表情で暮らしているのか必ず見ると思うが、佐久市には、まず、「長寿」、「空気が良い」、「水がおいしい」、「災害が少ない」という「暮らす」ことにおいて強みがある。そういった人が次に訪れたときは、地元の人々の表情を見ると思う。地域の人々の暮らしをもっと表に出すということも大事ではないのか。

委員 地元の人がどのように活動しているのか、それをどのように伝えていくのかというのが非常に重要である。

委員 シェア金沢の場合は、一切コマーシャルはしていないが、現在は、インターネットの時代であり、外国からも問い合わせがきた。「移住しませんか」と手を挙げるのも一つの手ではあるが、別の面から進めていくのも重要ではないか。

(3) 佐久市 CCRC 構想の意見交換

事務局より佐久市 CCRC の方向性について説明

移住者という視点から、観光交流推進員の山村より説明

- ・平成 23 年に神奈川県から移住した。
- ・当初は、薪ストーブを炊ける場所ということで合併前の望月町にログハウスを建てた。
- ・何となく選んだ場所であるが、生活の場ということで見てみると、東京から近い割に自然も多く、病院も多くあり、活断層も発見されていないということで、暮らす場としては、とても良い場所であった。
- ・空き家バンクの成約数は、日本一であるが、宅建協会と密に連携し、ホームページに載せて紹介しており、現地確認の際は、移住交流推進員として案内している。
- ・昨年から移住体験住宅を開設し、実際の暮らしを体験してもらっている。

<質疑応答>

委員 移住者と地元住民をどう融合していくのかというのが重要な視点である。「住居」というハコを作るのも大事であるが、移住して良かったと思えるようなまちづくりをしていくことも重要である。雄谷委員の説明を聞いて、老人と子供が交流するような仕組みを作ることやボランティアの機会を提供したりすることも重要であると感じた。ケアに関しては、佐久市は福祉サービスも充実している。少し弱ってきた人が、良いサービスを求めて、I ターン・U ターンしてくることも考えられる。CCRC という観点からは、若い元気な人に来てもらいたい訳だが、そういった人をどのようにケアや医療サービスに結び付けていくかという視点も重要である。

活動ということに関しては、情報というのが非常に重要である。その地域に、どのようなサービス、社会活動の機会があるのかというのが、移住者には分かりづらい。また、地元住民が既存の活動にどの程度迎え入れてくれるかというのが重要であると思う。

委員 先程話にもあったが、佐久市は、既に CCRC ができてきている地域であると感じている。そこから更にとということだと思うが、それならば、尚更、地元の人が、「長寿のまち」、「安全なまち」であるということ誇りとして自覚できるようにすること、人と人との繋がりを持てるようにすることに集中的に取り組んで行った方が良いのではないかと思う。生きがいや社会参加ということは、場所や機会ということを入念にチェックして進めていかなければ、上滑りすることもあるので、気を付けて進めていかなければいけない。全国どこでも核家族化の影響は避けられない。多年代との関わり合いというのが比較的少ないと思うので、そういった点を丁寧に潰していくことも大事ではな

いか。コスタリカでは、エコツーリズムをきちんとやっており、さまざまなものの循環を繋いで幸福感の創出に結びつけている。また、軍備を全く持たない国であり、その分福祉と医療にお金をかけて幸福感を高めている。そのことについて、国民も自負心を持っている。長い目で見た時、佐久市でも、既にある自然や長寿といった特性を認識し、壊さず守っていくという意識を市民が持っていけば、自然に周りに広がっていくと感じている。

委員 核家族化というのはあるが、それでも都会と違って、庭に別宅を建てるなど近くに住んでいるということがある。個別ではあるが密接な繋がりを持っている感じはある。

委員 そもそもという点であるが、この CCRC というのは国の施策ということであるが、この施策に佐久市が乗ろうとした理由は何か。どういうメリットがあると考えているのか。もう一点は、何かハコモノを作らなければいけないのかどうかということを知りたい。

事務局 国を挙げて地方創生に取り組むという流れの中で、佐久市も、1月に市長を本部長とする地方創生推進本部を立ち上げた。その中で4つの部会を作り、「人口の増加」や「仕事の創出」、「交流人口の増加」、「若者の結婚・出産の希望を叶える」といったそれぞれの分野に分けて検討を進めている。国の説明の中に、「日本版 CCRC の検討」という文言もあり、佐久市としては交通の要衝であるということ、医療面で優れていること、社会増であるということ、移住という面では全国トップクラスであるということを経合的に勘案した結果、この日本版 CCRC という国の施策に乗って人口の減少に歯止めをかけていきたいと考えている。6月の議会でこの事業を検討する予算を認めていただき、本日の会議となっている。

事務局 ハコモノの関係についてだが、移住ということになれば住む場所は必要となる。空き家バンクという間を取り持つ制度は実施してきており、今後も継続していきたい。ただ、市でハコモノを作ってそこに住んでもらうということではない。

委員 国の進める日本版 CCRC 構想に乗って、逆に制約が出てきてもいけないと思う。その部分がかきりしていないとこの検討会が目指すものが明確にならない。今の説明では明確な理由は見えないが、いずれにしても、佐久市の状況がかなり進んでいるということは認識することができた。ただ、ここで言っているように高齢者にスポットを当てて移住を推進すると、最終的には介護保険などさまざまな負担が増えてくる。実際には、仕事がある65歳前の人があるというのは少ないと思う。都会からの移住だけでなく、市内の地域で過疎になっている地域もあり、孤立している高齢者もいる。そういった方も含めた高齢者施策ということで考えてほしい。個人的には、都会の高齢者を地方に送り込めば良いというような国の考え方は理解が難しい。

委員 その件に関しては、国も発表を急ぎ過ぎた部分はあると思う。本当は移住ありきの政策ではない。政策的に気を引くために議論が詰まる前に出してしまった。移住したいという希望を持っている人が50%いる中で、無理やり東京から地方へ移動させるというものではない。受ける地方側も移住ありきで捉えない方が良い。増田座長も、「地域が豊かになれば自然と人が入ってくる」という言い方をすれば良かったと思う。

委員 CCRC とは高齢者が暮らすコミュニティの一つの理想形ではあるが、「大都市からの移住」ということをくつつけてしまうと無理がある。国の有識者会議でもそういった意見が多く出ており、最近、案として出てきたのが、大都市居住型でも近隣転居型でも良いということである。小林委員がおっしゃったように、この辺りの限界集落化して一番大変なところの住民が転居してくるということも対象となる訳である。それも含めて議論していただきたい。

委員 長野県は長寿であるが健康寿命はそれほど高くないというデータもある。健康寿命を高めようという所にポイントを置くことも重要ではないか。

委員 お年寄りに集まってもらって話を聞くと、みなさん生きがいを持っており元気である。自分の家の前の畑で採れた野菜を食べて、ご近所とも非常に緊密にコミュニケーションを取っているということで、都会ではこうはいかないという話を聞いた。良い所もたくさんあるが、計算して健康寿命ということで数えてみるとそれほど高くないということである。

委員 健康寿命の全国のデータでは介護保険認定者の中で集計したものではなかったか。佐久市は熱心に認定者を発掘しているということもあるのではないか。

委員 国が公表している健康寿命は、国民生活基礎調査を元にしており、「スポーツする・しない」ということなども含まれている。社会生活を営む機能プラス運動機能ということから解析している。それで見ると長野は高くないということになっている。その一方で介護保険者だけで見ると長野県の健康寿命は高い。要介護になる人は全国的に見て少ないが、アクティビティが落ちる人が多いということである。

委員 フィットネスというのは佐久市では浸透しているのか。

事務局 浸透率は低いと思う。

委員 先程紹介した事例の中で、ウェルネスを作る予定である。商業化されたウェルネス施設では、会員のうち3、4割のゴースト会員であり、2ヶ月に1回程度しか行かないような人からもお金を取っている。それを前提に成り立っている商売である。しかし、

今回の施設では、そういった人からはお金は取らないようにする予定である。商業的ではなく、幼少期からウェルネスというものに触れてもらい、ずっと続けてもらうために教育していくという全く違ったタイプのウェルネスをやろうと考えている。都会で経営する場合は、駅周辺の何万人という人が行きかう場所なので顔を知らなくても来なくても関係ない。しかし、我々が作る施設は、近所のおじいちゃん、おばあちゃんを相手にやる事業であるので、来ないのにお金を取るということとはできない。そうすると、都会とは違ったサポートをしていかなくてはいけない。しばらく顔を出さなければ、家に行って安否確認をしたりする。佐久市にはそういったウェルネスはないか。

事務局 佐久市の高齢者の中では、マレットゴルフが盛んに行われている。

オブザーバー ただ、冬の間はまったくできない。そういった冬期間の運動不足ということも、健康寿命のデータでマイナス面として出ているのではないか。

委員 ウェルネスというのは、健康を維持したいという人たちの意志が非常に強く働いている。そういったことを調べていくと、商業的なものでなくて、地元の人達を対象としたウェルネスを立ち上げるというのも良いのではないか。地元のグループでやっていくような手法も出てきている。健康寿命が短いということを調査していくうちに、違った切り口の事業も発掘できるのではないか。そうすれば他の市町村が着いてこられないような独自性が出てくる。ただ、今でも佐久市は他の市町村より進んでいる方であるのは間違いない。

委員 先進的な事例として取り上げられている施設は、始めるまでに相当の時間をかけている。「ゆいまーる那須」の事例では、居住希望者と何度も勉強会をやって、基本設計から関わって、2年程時間をかけて施設を作っている。地域住民と入居希望者と話し合いをしながら「佐久らしさ」というのを見出していく必要がある。自分が手塩にかけて作ったという思いを入居者に持ってもらうことも重要であり、地元住民や入居希望者と議論することも重要で、我々と検討してもしょうがないという面もある。

委員 「シェア金沢」のプロトタイプの施設の場合は、6年ほどかけて進めてきた。

《 7 その他 》

事務局より次回検討会について説明

《 8 閉会 》